中高一貫校の設置に係るパブリックコメントの結果について

平成２０年２月７日
高　等　学　校　課

１　パブリックコメントの応募状況

（１）意見募集したテーマ
「鳥取県における中高一貫校の在り方について」
（２）募集期間　１２月１９日（水）から１月２１日（月）まで
（３）応募状況　応募総数　１４０人

２　意見の概要

（１）中高一貫校設置について

賛　成	９０人（６４．３％）
反　対	２３人（１６．４％）
不　明	２７人（１９．３％）

（２）設置場所について

東　部	２３人（４６．０％）
中　部	８人（１６．０％）
西　部	７人（１４．０％）
各地区	８人（１６．０％）
その他	４人（　８．０％）

（３）設置形態について

中等教育学校	４人（１５．４％）
併設型	１８人（６９．２％）
連携型	４人（１５．４％）

３　主な意見

（１）設置に賛成の意見

①計画的・継続的な教育について
・６年間を見通したカリキュラムが組め、計画的・継続的に生徒の学力を伸ばすことが可能。
・リーダーとして活躍できる人材を育成するため、６年間じっくりと育て上げるべき。

②ゆとりある教育について
・子どもたちが自分の将来をじっくりと考え、目標のために自主的に努力していける。
・中高一貫校は、６年かけて、子ども自身が試行錯誤を繰り返しながら、じっくり自分の将来と向き合うことのできる教育現場を実現できる学校となりえる。

③社会性・人間性の育成について
・６年間共に過ごすことで、生徒に一体感・連帯感等が生まれ、友情・絆を深めていきやすい。
・リーダーには知識等はもちろんのこと、他者への共感や善悪の判断のできる心の涵養が大切。道徳や宗教に関する教養についても学びを深め、「知・徳・体」の育成に努めて欲しい。

④学力の向上について
・トップレベルの学力を引き上げるのに中高一貫教育は必要。

⑤選択肢の拡大について
・全県の中で、中高一貫校が１カ所ぐらいあっても選択肢が広がり、よいのではないか。

⑥地域を担う人材育成について
・政治、経済、産業、地域社会の分野で、リーダーシップのとれる人材養成が必要。また、そういう学校ができると、県内の学校に刺激を与え、活性化につながる。

⑦専門教育や部活動について
・普通科だけでなく、工業や商業などの専門教科を学ぶ中高一貫校もあってもよい。
・スポーツの分野において、中高一貫した指導で選手の力を伸ばして欲しい。

⑧教職員について
・中高一貫校の成功には、教師のたゆみない心配りが必要。校長をはじめ、管理職、教職員一同の高い見識と意欲が必要。
・理念を共有できる優秀な教員構成が必要。優秀な職員を県外から招く等の対応も必要。

⑨設置形態について

・併設型の中高一貫校は、中等教育が分散されてるので、中等教育学校をつくるのがよい。
・実績のある高校を活用する併設型が、一貫教育の効果を考えると最適ではないか。
・併設型は、高校段階で新規に入学する生徒が、学習内容の違いで適応し難いのではないか。
・生徒減の中で、費用対効果を考えると、連携型の中高一貫校にならざるを得ないが、それでは現在の枠組みの延長であり、期待されるような効果を得るのは難しい。
・中高一貫だけでなく幼稚園から高校まで一貫したシステムを作り、そこに研究機関として鳥取大学を入れてはどうか。

⑩設置場所・学校数等について

・私立の中高一貫校の経営を考えるのであれば、東部地区にすべき。
・中部地区は、全県から通学しやすいという利便性がある。
・西部の進学校も基礎学力低下が否めないので、西部地区に設置すればプラスに働く。
・設置校が少ないと遠くからの通学が困難。東・中・西部に１校ずつ設置することが望ましい。

（２）設置に反対の意見

①生徒や学校に格差を生む

・県民が望むのは、全ての子どもにしっかりと学力をつけること。一部の選ばれた子どもたちだけに体験学習や研究活動などの特別な教育をさせるのは納得がいかない。
・リーダーとして活躍できるという理念は、逆に、他の学校との間に格差を生じかねず反対。

②過度の受験競争の発生

・県立の中学校が新たに設置されると希望者が集中し、過度な競争が生まれるおそれがある。

③民間に任せるべき

・民間で経営できるだけのニーズがあるなら、民間で設立・運営すべき。

④その他

・既存の中学と高校の連携では、掲げられている教育理念が実現できないのか。現在進行中の高校改革の成果分析を示した後、改めて県民に問うべき。
・高校教育の在り方、低学力の生徒の生き方を模索する場のないことや不登校、非行、いじめなどの早急な解決を、まず考えるべき。
・生徒減の状況で中学校を新設すれば、既存の中学校は学級減が加速し、一貫校へ通う子どもが抜けて多様性を失う。また、県立中学の生徒・保護者は地元とのつながりも希薄になる。
・子どもの数が少ない中で中高一貫教育に取り組んでも、かえって勉学する上で刺激の少ない学校となりかねず、学力低下を招くことになる。

（３）導入にあたり配慮を求める意見

・中高一貫校は、鳥取県の学力水準を上げるのにはよいが、教育は有名校への進学率だけで評価されるべきではない。
・目的意識を持った生徒と、そうでない生徒との学力差がさらに広がるのではないか心配。
・６年間一緒に過ごすことで、閉鎖的になったり、長期間同じ生徒がいじめのターゲットにならないか。
・面接・適性検査だけでは、公平性、公正性に限界がある。適正な評価比率を設定し、漢字・計算・一般常識等の学力検査は実施した方がよい。
・少子化で今後子どもが減る中で新たに中高一貫校を設置すれば、既存の学校の統廃合が起こるのではないか。
・遠方からの子どものために、寮など宿舎の準備が必要。
・教育の機会均等をはかる意味からも、通学区域は県全域とすべき。
・普通科高校ばかりに焦点をあわせてはいないか。専門高校もしっかりと存続させて欲しい。
・他県、あるいは他の国で、中高一貫教育をしている成功例などをあげてもらわなければ、改革の必要性を感じられない。

４　今後の予定

いただいた意見は、鳥取県教育審議会における審議の参考とするとともに、今後の鳥取県中高一貫教育の検討に生かしていく予定。

資料

「鳥取県における中高一貫教育の在り方」に係る県民からの主な意見

平成２０年２月７日
高　等　学　校　課

１　設置に賛成の意見

（１）計画的・継続的な教育について

・長期的な視野に立ち、これまでにない実験的な試みもどんどんできる、活力ある教育を期待。
・科学的な思考力、理解を育成すると同時に、若いアイデアを実践する実験、探究の時間を作ったり、一つのテーマについて長期間の実践ができることが望ましい。
・６年間を見通したカリキュラムが組め、計画的・継続的に生徒の学力を伸ばすことが可能。
・高校選択は難しく、子どもの判断力、精神面も低迷している。６年は、将来についてしっかり見つめ直す上で、とてもプラスになる。
・リーダーとして活躍できる人材を育成するため、６年間じっくりと育て上げるべき。
・専門的な内容を目指す人にとっては、６年間はとても有利である。
・将来新たな技術を開発したり、今の日本の技術力を発展させられる人材を養成すべき。
・中学から高校までしっかりと学習面、精神面をサポートすることで、学力低下に対応したり、中学生だけでは考えつかない将来を目指せる利点がある。
・中学校で課題を抱えた生徒がいても、中高一貫校であれば、高校とで連帯して対応できる。
・中高一貫教育で、子どものいろんな可能性や知識をさらに広げて欲しい。

（２）ゆとりある教育について

・中高一貫校は、子どもたちが自分の将来をじっくりと考え、目標のために自主的に努力していけるのではないか。
・受験勉強のための授業がなくなるかわりに、ゆったりと視野を広げ、目的意識を持ち、創造力豊かな人間作りを目指して欲しい。
・単なる普通科ではなく、独自なカリキュラムで自然や社会をより深く追求する普通科型専門学科の設置を望む。
・大学入試にとらわれない中高一貫校にして欲しい。
・勉強をじっくり理解し、次のステップに挑戦する場も大切なので、高いレベルに挑戦する教室、ゆったりと学習する教室とに分けたらどうか。
・高校入試による弊害をなくし、６年間の長期にわたるバランスのとれた教育が可能。
・子どもたちは入試がないので楽であり、親も塾代がかからないので経済的に助かる。
・現在、高校入試で不合格となり、挫折して社会に入れない子どもが増えており、入試がなければ、そういう子どもたちが減るのではないか。
・中高一貫校は、６年かけて、子ども自身が試行錯誤を繰り返しながら、じっくり自分の将来と向き合うことのできる教育現場を実現できる学校となりえるのではないか。

（３）社会性・人間性の育成について

・６年間一緒に過ごすことで、生徒たちに一体感・連帯感等が生まれ、友情・絆を深めていきやすいのではないか。
・少子化で一人っ子の生徒も多いので、中高一貫校は、社会性・コミュニケーション能力・相互扶助の精神の形成等、人間性の成長に大いに役立つ。
・６年間の学校生活を通して、生徒間、教職員と生徒、保護者間の人間関係が構築され、豊かな人間性が育成される。
・受験にとらわれ、周りが見えなくなるよりも、人間性を育てて欲しい。
・しつけ教育も含め、様々な体験活動や豊かな人間性の育成などに重点的に取り組んで欲しい。
・ぜひ実現させ、国の宝、子どものために体験、訓練をもとに、自分の言動に自信と、鳥取出

身の誇りを持たせて欲しい。
・リーダーには知識等はもちろんのこと、他者への共感や善悪の判断のできる心の涵養が大切。道徳や宗教に関する教養についても学びを深め、「知・徳・体」の育成に努めて欲しい。
・教師が簡単に手をさしのべるのではなく、生徒自らが発信できるような環境を作る。
・学力だけではなく、部活や学校生活の中から、さまざまなことを学んでほしい。
・６年間で心身ともに鍛え、良識ある社会人の基礎を育成し、生徒保護者の望む進路へ進めるよう最大限の努力をし結果を出して欲しい。
・生徒は中学１年生から高校３年生まで、全ての面で差があるので、縦割りのグループ活動を学校生活の全ての分野に活用すれば、理想的な方向へ導きやすくなる。
・地区内の廃校、山間地の施設を有効に使い、自然と親しみながら集団生活を送らせる。
・教育理念は、「日本や世界でリーダーとして活躍できる人材を育成する」に集約すべき。体験活動やコミュニケーション能力などの育成は、具体の方法論にすぎない。

（４）学力の向上について
・中高一貫校を設置する目的は、低迷する鳥取県の進学率や入学率のアップ。
・トップレベルの学力を引き上げるのに中高一貫教育は必要。
・総合学科等の特色ある教育課程を編成し、全国に先駆けた学校にする。寮を設置し、専門学科は留学生を視野に入れて全国区とし、普通科は全国トップクラスの学力を目指す。
・教育特区を申請し、全国から優秀な生徒を募集し、ラサール高校や五ヶ瀬中等教育学校のような全国に誇れる学校をつくる。
・中学校では、個性を抑えて生活する生徒が多い。周りから中傷されずに勉強を頑張れる環境を作って欲しい。
・学校内で飛び級を設け、精鋭たちをよりよく育てるとよい。
・部活動は原則として設けず、そのエネルギーを教師も生徒も主に勉学に向ければよい。
・地域一番の進学校に設置し、進学に特化した中高一貫校にして欲しい。
・都心の予備校教師を招くなどして、全国に通用するような、魅力的な高校を作って欲しい。
・中高一貫校を設置して、都会との地域格差をなくして欲しい。
・競争原理を取り入れ、外部模試を積極的に導入して順位付けをしたり、県外講師を招いて生徒に県外のことも意識させたりして、学業の優先をアピールすべき。
・３クラス編成の習熟度別に学習していくシステムを取入れる必要がある。

（５）選択肢の拡大について
・全県の中で、中高一貫校が１カ所ぐらいあっても選択肢が広がり、よいのではないか。
・リーダー養成ではなく、多様な家庭のライフスタイルに合わせ選択肢を広げる方向で考えてはどうか。
・県立で設置されれば、教職員の連携、学費の面からも、プラス面が多い。

（６）地域を担う人材育成について
・政治、経済、産業、地域社会の分野で、リーダーシップのとれる人材養成が必要。また、そういう学校ができると、県内の学校に刺激を与え、活性化につながる。
・将来、鳥取に帰ってきて、県を担う人材が育ってくれればよい。
・進学対応に偏り、単に県外へ人材流出させることにならないよう、「地域・県のリーダーの養成」を主眼とすべき。
・地域の元気を維持するためにも、現在の高校に設置して存続させたい。

（７）専門教育や部活動について
・普通科だけでなく、工業や商業などの専門教科を学ぶ中高一貫校もあってもよい。
・スポーツの分野において、中高一貫した指導で選手の力を伸ばして欲しい。

・公立中高一貫教育は、学力向上だけでなく、高校受検のために中断せざるを得ない部活動を継続することができ、文武両道としても有効である。
・一貫校の体験活動等を通じて豊かな人間性を育成するという理念は、発達障害や軽度の知的障害など、「特別な教育ニーズ」を有する子どもにとって効果が高い。
・前半では社会実習等を通して将来像を決め、後半に大学進学、工業系、商業系等多様なコース選択に対応できる学校を設置して欲しい。

（８）教職員について

・中高一貫校の成功には、教師のたゆみない心配りが必要。校長をはじめ、管理職、教職員一同の高い見識と意欲が必要。
・生徒が様々なことに興味を持てるよう、様々な知識を身に付け、発信できる教師を育成する。
・マナーや常識の欠如した生徒がいたり、それを注意しない教師がいる。中高一貫でも社会経験豊かな教師の配置、地域の方との交流など、人間性豊かな教師の計画的な育成が重要。
・校長は２年契約更新の公募制とするなど、今までの県立高校にない学校作りを望む。
・掲げた教育理念を達成しようとしても、これまで通りの人事異動ではすぐに風化しかねない。
・理念を共有できる優秀な教員構成が必要。優秀な職員を県外から招く等の対応も必要。
・生徒による教員の評価制度を導入すべき。

（９）設置形態について

〈中等教育学校〉

・交通の便のよい地域に、新しい中等教育学校を建設するのが望ましい。
・中等教育学校なら、高校入試、高校中退等の多くの問題の解決に向かうのではないかと期待。
・併設型の中高一貫校は、中等教育が分散されてるので、中等教育学校をつくるのがよい。
・中等教育学校は、地域との交流も少なく、小学校と変わらない狭い社会になるのではないか。

〈併設型〉

・実績のある高校を活用する併設型が、一貫教育の効果を考えると最適ではないか。
・中等教育学校では入学後不適応になった場合の対応が難しく、連携型では中高一貫の効果が発揮されないので、併設型がよい。
・財政難を考慮し、閉校した県立高等学校を活用した併設型中高一貫校の設置が望ましい。
・併設型は、高校段階で新規に入学する生徒が、学習内容の違いで適応し難いのではないか。
・立地条件がよければ、既存の中学校の敷地内に高校を新設することもあってよい。

〈連携型〉

・自然体験豊富に育った子どもには、市内の子どもにはない良さが身につく。郡部に連携型中高一貫校を設置してもよいのでは。
・連携型として地域社会とも交流し、生徒が社会について広く経験し成長できるのはよいこと。
・生徒減の中で、費用対効果を考えると、連携型の中高一貫校にならざるを得ないが、それでは現在の枠組みの延長であり、期待されるような効果を得るのは難しい。
・連携型は、実質的に中高が別の学校生活であり、従来の学校と変わりがない。

〈その他〉

・中高一貫校は一つの選択肢としてあってもよいが、小、中学校のつながりの方が大切。
・中高にとらわれることなく、中・高・大学とした方が郷土への愛着を高めることとなり、地域を活性化させることができる。
・校長の熱い思いで実行し、成果を上げるには、小・中・高が連携した方がよい。
・中高一貫だけでなく幼稚園から高校まで一貫したシステムを作り、そこに研究機関として鳥取大学を入れてはどうか。
・中高一貫校では、隣国の文字くらいは読めるような教育をすべき。

（１０）設置場所・学校数等について

〈東部への設置〉

・私立が中・西部にはある。ＪＲの沿線で、附属小中学校から離れた場所がよい。
・私立の中高一貫校の経営を考えるのであれば、東部にすべき。
・東部には、地域の中学校と高校とのつながりが深い学校が存在する。
・スポーツ施設の充実や自然環境、過疎地であることなどの理由から八頭高校を希望。
・智頭農林高校を母体に、全寮制の普通科の中高一貫校を作るのがよい。
・鳥取商業高校と鳥取湖陵高校を合併し、普通科も設置する。
・鳥取東高校の伝統・校風・教育力などが中高一貫校の教育理念と合致する。これまでのＳＳＨや専攻科、国際交流などの実績、専攻科が廃止された場合その施設も活用できる。

〈中部への設置〉

・全県から通学しやすいという利便性がある。
・中部地区は、中学の授業で発展的内容にほとんど触れられておらず、意欲のある生徒を十分に伸ばせてないので、中高一貫にすることで改善を図る。
・現在、倉吉東高校で中学生講座も実施しており、これを発展させ中学と高校の教員の指導力が高まれば、県全体の教育力の向上につながる。

〈西部への設置〉

・西部の進学校も基礎学力低下が否めないので、そこに設置すればプラスに働く。
・西部には、米子東高校のライバル校となる高校が必要。

〈その他〉

・全く別の場所に新しい中高一貫進学校を作り、そのことで選択肢が増え、伝統校も危機感を持ち努力する。その結果、県全体がレベルアップするのではないか。
・子どもたちに同じチャンスを与えるため、すべての学校を中高一貫校にしてはどうか。
・伝統校などを撤廃し、公立中学も統合して、希望する生徒は全員中高一貫校に行けるようにすれば、将来有望な人材を作ることができる。
・中高一貫校は、各地区に設置するのではなく、全県で一校あればよい。
・設置校が少ないと遠くからの通学が困難。東・中・西部に１校ずつ設置することが望ましい。
・まず、学校数の多い東部、西部に設置するのが望ましい。
・県内の地域格差をなくすため、各地区にそれぞれ設置すべき。
・東中西部の進学トップ校に併設し、競わせるのが全県の向上につながる。県の均衡ある発展と各地区の高校教育の歴史的経緯を考慮すべき。

２　設置に反対の意見

（１）制度に反対

・以前に比べ人間が悪くなったのは教育を変えすぎたから。これ以上教育を変えないで欲しい。
・中高一貫教育のシステムで、高度な学力を養成できるとは限らない。

（２）すべての子どもに対応

・県民が望むのは、全ての子どもにしっかりと学力をつけること。一部の選ばれた子どもたちだけに体験学習や研究活動などの特別な教育をさせるのは納得がいかない。
・設置数、設置場所の面で、県民が地理的にも経済的にも平等に教育サービスが受けられることがイメージできない。

・中高一貫教育は教育の平等を阻害する憲法違反の可能性があり、実施そのものに反対。もっと、全体の教育レベルを上げるべきである。
・県立なら、地域の全体的な底上げこそすべき。都会に出て行ってしまう若者を増やすだけの学校を、税金で作るべきではない。

（３）既存の教育、学校で

・既存の中学と高校の連携では、掲げられている教育理念が実現できないのか。現在進行中の高校改革の成果分析を示した後、改めて県民に問うべき。
・すでに進学校はあるのに、このような学力偏重、競争意識強化の中高一貫校が必要なのか。
・１２歳で進路を決めるのは困難。
・競争のないところに進歩はない。お互いが切磋琢磨しながら伸びて行くには中学校と高等学校が別の方がよい。
・この教育理念の実現は、中高一貫、中高の別にかかわらず、取り組むべき教育の内容である。
・現在あるものを時間をかけてよいものにしていかないと、真の改善とならない。教育の質を高めれば、生徒も変わる。
・すべての学校が子どもたちの学びの場。どの学校からも素晴らしい人材が育つ可能性が必要。

（４）教育理念に反対

・日本や世界のことを考える前に、まず鳥取を愛し、地道に県を安定させる人材を作るべき。
・社会でリーダーとなりうる人材の育成は、学力だけで決まるとは思えない。人間として、人格形成の部分も重要。
・どのような人物が２１世紀社会に必要なリーダーなのか。東大に進ませればいいと思うのは、あまりにも教育哲学の不在。
・リーダーとして活躍できるという理念は、逆に、他の学校との間に格差を生じかねず反対。
・リーダーは、さまざまな考え方や力の違いを乗り越え、とりまとめていく中で育つものであり、高いレベルの生徒ばかりの中では育たない。
・リーダーという選別が小学６年生でなされる重大さを考えて欲しい。
・東大進学を目標にすることは間違い。陰湿な競争のない理想的な学校になることを望む。
・知・徳・体を基本に、人間として目指す姿やどういう学力をねらっているのか再確認すべき。

（５）他の教育課題の解決を

・高校教育の在り方、低学力の生徒の生き方を模索する場のないことや不登校、非行、いじめなどの早急な解決を、まず考えるべき。
・中高一貫校の設置ではなく、意欲ある児童・生徒が県外の著名校で学ぶための助成づくりや、現在の教育システムの見直しを徹底して行うべき。
・受験が目的のごく一部の生徒のための学力向上と、多様な個性を持った生徒、どちらが本県の公教育にとって大切か考えて欲しい。
・中高一貫教育よりも、むしろ教員数を増やし、少人数で細かな配慮ができる教育が大事。
・県外私立校の熱い授業内容を聞けば、トップレベルの子どもが県外校を目指すのは当然であり、それに張り合えるだけの魅力ある高校作りこそ、今一番地域に求められている。
・県や市で分かれている教育委員会の在り方をまず議論すべき。
・中高一貫校人気は、現在の中学、高校での教育に対する不満の表れ。現在の教育内容、指導方法を見直しせずに、安易に中高一貫校を設置すべきではない。
・子どもの闘争心、向上心を奪っている現在の教育のやり方は間違い。まず、現状をよくしてから検討して欲しい。

（６）私学に任せるべき

・民間で経営できるだけのニーズがあるなら、民間で設立・運営すべき。

・一部の高いレベルの子どもを育てるために県費を投じる必要はなく、県内にそのような学校法人がないのなら、県外からでも誘致する方がコスト面でも安い。
・学力的に劣っていても、一部の金銭的に余裕のある子どものみがリーダー教育を受けられることになりかねない。それは、公的機関がやるべきことか。

（７）地域への影響

・市外から市内の高校への通学が加速し、過疎化がますます進行する。
・生徒減の状況で中学校を新設すれば、既存の中学校は学級減が加速し、一貫校へ通う子どもが抜けて多様性を失う。また、県立中学の生徒・保護者は地元とのつながりも希薄になる。
・子どもたちにエリート意識を育て、地域での子どもたちの和を壊してしまう可能性も大きい。
・地域に密着しない広範囲の生徒を集めた学校で、郷土への愛着が育つとは思えない。

（８）刺激の少なさ

・子どもの数が少ない中で中高一貫教育に取り組んでも、かえって勉学する上で刺激の少ない学校となりかねず、学力低下を招くことになる。
・友達の輪が広がらない。
・多感な中学時代に、多様な価値観に触れる機会を大切にして欲しい。中高一貫校ができれば、そこに通う子どもたちが多様な価値観に触れる機会をなくす。
・中学、高校で違う環境、友達との出会いは、社会性を身につけ成人になる過程で有効。

（９）過度の受検競争

・県立の中学校が新たに設置されると希望者が集中し、過度な競争が生まれるおそれがある。

３　導入にあたり配慮を求める意見

（１）進学指導について

・中高一貫校は、鳥取県の学力水準を上げるのにはよいが、教育は有名校への進学率だけで評価されるべきではない。
・中高一貫教育が、国公立大学の合格率を高めるための手段とならないようにして欲しい。
・一部生徒の東大、京大への入学も大切だが、学校全体のレベルアップも力を入れて欲しい。
・大学進学率を上げるために、多くの生徒の進路が曲げられないようにして欲しい。
・高校２年次に進学と就職のクラス分けを行い、それぞれの進路に沿った指導を行うのがよい。

（２）学力差について

・目的意識を持った生徒と、そうでない生徒との学力差がさらに広がるのではないか心配。
・本当に救う必要があるのは、勉強について行けない子どもたちである。
・高校から入学する生徒が中核となり、中学校から進級してきた生徒を引っ張ることで活気のある学校となる必要がある。
・生徒の学力に差があった場合に、どのような授業をするのか。

（３）人間関係について

・６年間一緒に過ごすことで、閉鎖的になったり、長期間同じ生徒がいじめのターゲットにならないか。
・１，２クラスだと、生徒や教員との関係が悪化した時逃げ場がないので、多い方がよい。
・気の合わない生徒・教師等がいれば、６年間は大変なストレスとなる。
・中高一貫校は、本来なら出会うはずの新しい仲間を作る場が与えられにくい。

（４）入学者選抜について

（中学への入学）
・面接と適性検査のみで入学した生徒が、果たして高いレベルの学力を身につけられるか疑問。
・ゆとり教育で育った子どもたちが、受験勉強の努力をせずに楽に入学しようとするシステムになりはしないか心配。
・面接・適性検査だけでは、公平性、公正性に限界がある。適正な評価比率を設定し、漢字・計算・一般常識等の学力検査は実施した方がよい。また、小学校在学中に学力検定試験のようなものを実施し、その結果を学力検査にかえてもよい。
・目標を明確にしないまま入学した生徒にとっては、６年間は長い。
・志願者が多数の場合、試験以外のどのような基準で判断するのか疑問。

（高校への入学）
・高校から中高一貫校に入学する場合、推薦枠を設ける。特異な才能は、決まり切った方法では育たない。
・高校からの入学者のみに学力検査があるのは不公平。

（その他）
・ある程度余裕のある定員にしなければ、高倍率となり、今までの受験制度と変わらなくなる。
・６年間、人生を決めるアクセント的な試験がないので、のんべんだらりと過ごす生徒も出る。

（５）他の学校や地域への影響
・小学校の受験熱の加熱による弊害を、十分に予測して早めの対応を求める。
・適性や将来について十分考えられない年齢の小学生に、進路の選択をさせることは不安。
・市部の学校が中高一貫校になると、そこへ生徒が集まり、周辺地域が取り残され、新たな格差が生まれる。
・少子化で今後子どもが減る中で新たに中高一貫校を設置すれば、既存の学校の統廃合が起こるのではないか。

（６）通学について
・遠方からの子どものために、寮など宿舎の準備が必要。
・どこからでも通学できるように、バスなど交通手段を整えて欲しい。
・教育の機会均等をはかる意味からも、通学区域は県全域とすべき。

３　その他の意見
・受験を撤廃し、純粋に人間性と学問を学びたい素質を持たせることが大切。
・ゆとり教育で子どもたちの学力が低くなっており、少しは競争意識を持たせるのもよい。
・実際に必要なのは単なる知識より実体験。それをもう少し早い時期からはじめてもよい。
・学力とは、大学入学の成績ではなく、もっと鳥取県の独自の「学力」が必ずあると思う。
・習熟度別や異年齢集団の学習は、教科によって効果が期待できる内容と従来のやり方がよいものとに整理し、検討する必要がある。

・学校の教育方針を明確に打ち出し、教師が余裕をもって教育にあたれるかがポイント。

・普通科高校ばかりに焦点をあわせてはいないか。専門高校もしっかりと存続させて欲しい。
・中高一貫校の設置より、専攻科を充実することでゆったりと実力を養成していく方がよい。

・県全体の学力の伸長をはかるのなら、きちんとした生活習慣をつけるとか、親子の触れ合いなど家庭を基盤にすることに力を入れていくべき。

・学校教育は家庭教育や地域教育、社会教育と連携して実践を積まないと成果は上がらない。
・幼、小、中が連携して基本的生活習慣を徹底するとともに、教員を兼務発令し、校種を超えた指導をすべき。
・今の子どもたちに一番つけて欲しい力は、忍耐力と集中力。これは、学力向上には必須。

・メリットを示されただけでは意見も記入できない。デメリットも説明して欲しい。
・他県、あるいは他の国で、中高一貫教育をしている成功例などをあげてもらわなければ、改革の必要性を感じられない。